

医科歯科大生File

高校時代、医療メーカーのCMをきっかけに、検査技術の発展に貢献する臨床検査技師を志したという荻野芽生さん。「視野を広く持ちつつ、足下の社会の持続的発展に寄与できる人になりたい」という夢を抱き、授業や部活動に全力で取り組む4年間を送ってきました。

学びの中でも、大川龍之介教授の分析化学の授業で学んだ「異常値を見極める力」の重要性は、深く心に刻まれているといいます。

「検査の手違い、機械の故障など、さまざまな要素を念頭に置いてデータを見る意識を持つようになりました。臨床検査技師には、検査結果を伝えるだけでなく、誤ったデータを伝えるくないという、関所のような役割もあると感じた、とても印象深い授業です」

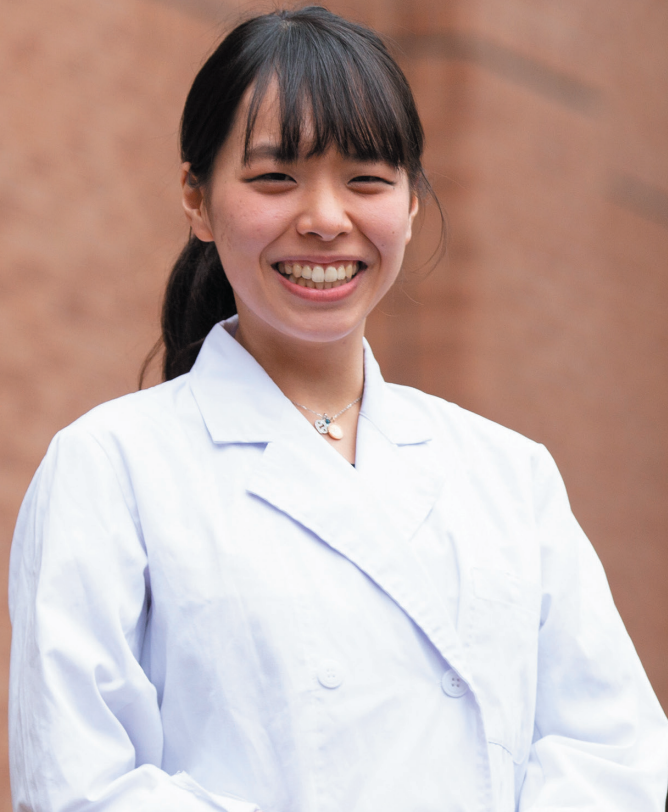
4年生で受けたチーム医療入門では、臨床検査技師の負う責任を強く認識する大切な経験もしました。

臨床検査技師の使命と 発信力の大切さを 学んだ4年間

No.020

医学部 保健衛生学科
検査技術学専攻 4年
荻野 芽生さん

おぎの・めい
中学時代の恩師に教わった「Stay local, Look global」という言葉が座右の銘。3年夏にはタイ・チュロンコン大学への海外派遣プログラムに参加し、現地の学生の熱意や語学力に刺激を受けました。



「医学科や看護学専攻の学生と症例を検討する中で不適切な検体による異常値に気付いたのですが、その検査結果を判断材料から外すべきという意見に理解を得ることができず、最終的にチームとして誤った診断を導いてしまったことがあります。これまでに学んだことが自分に身についてきたと実感できた反面、臨床検査技師は患者を誤診から守る最初の砦であると痛感しました。これからさらに経験を重ね、他職種から信頼の置かれる検査技師を目指したいです」

部活動の「ピアノの会」では、コンサートのために半年以上練習を重ねるなど、どんなことにも粘り強く取り組む荻野さん。卒業研究では、血液検体の抗酸化能の測定法の検討に打ち込み、卒業後も東京医科歯科大学大学院で研究を続けます。

「将来は、研究室のテーマである、心血管疾患の早期病態予測やリスク予測に役立つバイオマーカーの発見や、その物質の検査法の開発に貢献したいと考えています。使命感と熱意を持ち、自分のテーマを広く発信できる研究者になりたいです」